

忠臣蔵番外編「大坂の段」

湯川 敏男

【目的】

一昔前まで、年末になると、芝居や映画に「忠臣蔵」が掛かり、現在でも、テレビニュースで赤穂義士が眠る東京高輪の泉岳寺や赤穂市の花岳寺、大石神社の祭典で討ち入り装束に身を固めた時のスターが大石内蔵助くらのすけなどに扮し行列する「義士祭」の様子が放映される。これは、赤穂四十七士が江戸本所の吉良屋敷に討ち入り、主君浅野内匠頭たくみのかみの仇である吉良上野介こうずけのすけを討ち本懐を成し遂げた12月14日に合わせて実施される行事である。この義士祭は大阪においても天王寺区きんじょうじの吉祥寺で毎年催されている。

調べてみると大阪にも、忠臣蔵ゆかりの地と人物がたくさんあることが判明した。

これらを地域ごとにグループ化し巡る「忠臣蔵ゆかりの地と人物を巡る探訪コース」を提言することを本研究の目的とする。

【内容】

「忠臣蔵ゆかりの地と人物を巡る探訪コース」として人物については討ち入り前に自害した萱野三平かやの、親に代わって義士になった矢頭右衛門七やとうえもしち、歌舞伎などの虚（虚構）から実（実話）になった天野屋利兵衛、そして討ち入り後も生き残った寺坂吉右衛門の4名を取り上げ、その人物に関わるエピソードとともに関連史跡を紹介する。

また、大阪府下各地に分散する関連史跡については箕面市萱野郷に残る萱野三平旧宅を中心とした《北摂エリア》、大阪市北区の矢頭右衛門七の墓がある浄祐寺じょうゆうじを中心とした《大阪市きたエリア》、大阪市中央区の東横堀川に架かる大手橋付近に点在する天野屋利兵衛関連史跡を巡る《大阪市なかエリア》、大阪市天王寺区にある寺坂吉右衛門が建碑を依頼した赤穂四十七士の墓が残る吉祥寺を中心とした《大阪市みなみエリア》、最後に上記エリアに含まれない赤穂四十七士の墓の一部が残る一運寺、内匠頭の宿泊の記録が残る郡山宿本陣（椿の本陣）などを《その他エリア》として提言する。

【結果】

今年度は、『忠臣蔵番外編「大坂の段」』と題して大阪にある忠臣蔵ゆかりの地と人物を研究テーマに進めたが、赤穂事件は実際にあった事件であるが、事件の発端の松の廊下での刃傷の原因からして謎であり、その後、人形浄瑠璃（文楽）や歌舞伎の演目として脚色、創作が入り、虚と実が入り混じった研究報告となった。今後さらに引き続き、研究を進めていきたい。昨年度の『蔵屋敷の神さん今どこに』でもそうであったが昔の文献に記載があるものの今次の戦災で亡くなった史跡が余りにも多いのに愕然とした。

1 大序. 前口上

義士祭は、北は北海道から南は九州熊本まで、全国各地で催され、大阪でも、黒と白の三角形の段だら模様きつしやうじの築地塀きつしやうじでお馴染みの天王寺区六万休町の吉祥寺で毎年催されている。また、大阪は、江戸と赤穂を結ぶ往還（東海道+西国街道+山陽道）の中間地点に位置し、瀬戸内海と淀川や大和川との結節点であり、舟運の要の地で、中之島に存在した諸藩の蔵屋敷の一つに赤穂藩もあり、「忠臣蔵」と関わり合いがある地が点在し、ゆかりの人物も頻りに往来した。



以下に大阪の忠臣蔵ゆかりの人物をそのエピソードとともに記載し、そのゆかりの地を巡る探訪コースを地域ごとに紹介する。

『東西トウサイ東西トウサイ〜！ここもど御覧ごらんじます〜は、「忠臣蔵番外編「大坂の段」」に御座います〜。暫くの間、お付き合いの程ほどを御願ごんい奉たまります〜。』<♪チョン！>

2 段目. 元禄赤穂事件の段

江戸幕府は毎年正月、朝廷に年頭祝賀の使者を派遣し、その返礼として朝廷も3月に年賀答礼ちやうしの勅使きようおうやくを江戸へ派遣した。この勅使の饗応役きようおうやく（接待役）に播州赤穂藩主の浅野内匠頭長矩たくみのかみを、その指南役こうずけのすけよしなかに高家筆頭の吉良上野介義央が任命されていた。

事件の発端は、晴れの饗応最終日、1701年（元禄14年）3月14日に江戸城松の廊下で起った逆上した内匠頭が上野介に斬りつけた刃傷事件であった。内匠頭はその日のうちに切腹、赤穂5万3千石は没収、浅野家断絶、吉良家にはお咎めなしとなった。

この御家の一大事の第一報は、江戸から赤穂までの155里（約620キロ）を普通の旅人なら17日程かかるところを、夜を日に継ぐ早駕籠で、僅か4日半で赤穂に伝えられた。

主君を失い、お家断絶を伝えられた藩内では、籠城か開城、殉死か復讐で対立したが、城代家老大石内蔵助は、城を明け渡すことを決断し、一ヶ月後の4月19日に無血のまま開城し赤穂藩士は赤穂浪士となった。この時、内蔵助に従う者は僅か60～80名であった。

内蔵助は赤穂藩再興を図ったが受け入れられず、着々と仇討ちの計画を進めていった。

時に1702年（元禄15年）の主君の月命日の12月14日15日の午前4時夜、内蔵助以下四十七士は吉良邸へ討ち入った。夜も白み始めたころ、ようやく味噌倉（納戸：炭も保管）に潜む上野介を見付け、本懐を遂げた。その足で内匠頭の眠る泉岳寺に赴き上野介の御首級みしろしを墓前に捧げ、仇討ちを報告した。

その後、浪士たちは細川・松平・毛利・水野の4大家へお預けとなり、50日後の1703年（元禄16年）2月4日にお預け先でそれぞれ切腹、吉良家は断絶となり、のち主君と同じ泉岳寺に葬られた。

この事により赤穂浪士は赤穂義士と云い伝えられることとなった。

余談ながら、「忠臣蔵」は、「蔵いっぱいおんなの忠臣」や内蔵助の「蔵」に掛けたもの。『仮名手本忠臣蔵』は、習字のかな手本の「いろは47文字」と「赤穂義士47名」の符合、いろは歌を7字毎に区切って最後尾を順に読む「咎無くて死す」の暗号が込められている。



吉祥寺・大石内蔵助像

3 段目. 忠臣蔵銘々の段

大阪に関連する忠臣蔵ゆかりの人物の中から今回は以下の4名を取り上げる。

①萱野郷の場…萱野三平（討ち入り前に自害した人物）

事件の第一報を赤穂に伝えた早駕籠の使者の一人として萱野郷(現 箕面市萱野)出身の萱野三平が乗っていた。三平が途中、西国街道沿いの生家前を通過する日に前日の3月17日に亡くなった母小満の葬儀に出会うが、涙ながらに掌を合わせて赤穂へ注進した。赤穂城引渡しの後、討入りの義盟に加わっていた三平は生家へ戻り、討ち入りの時期を待っていた。この折、父から新たな仕官の話があり、父に対する孝と、主君浅野内匠頭への忠との板挟みに悩み苦しんだ末、討ち入りの11ヶ月前の1702年(元禄15年)の主君の月命日の1月14日に



萱野三平旧邸長屋門

三平は生家長屋門の一室で実父と内蔵助に遺書を残し、27歳を一期として生涯を閉じた。

三平の萱野郷の実家は現在長屋門と土塀の一部が残され、自刃部屋などが当時のままとされており、彼の俳号涓泉を冠した萱野三平記念館「涓泉亭」として公開されている。

②浄祐寺の場…矢頭右衛門七(親に代わって義士になった人物)

浪々の身の矢頭一家は、大坂堂島新地に借家し、決行の準備をしていたが、討入りの義盟に加わっていた父親の長助が病で寝たきりとなり、江戸、赤穂との連絡、山科や円山の会議には部屋住み身分の矢頭右衛門七が代理として出席した。1702年(元禄15年)8月15日、父が死去し、右衛門七17歳のとき義盟を引き継ぐことになった。9月7日、江戸へ出立の砌、里人に銭5貫文(1両1分=1¼両)を借金し、後日大石内蔵助が5両も返金している。



矢頭親子の墓
右衛門七 長助

長助の墓所は天王寺覚心院あったが、その後、同寺は改宗移転して上福島(現 北区堂島)の浄祐寺となり現在に至っている。境内には父の墓と共に右衛門七の墓(供養塔)が建立されている。また、同寺の西に当時あった梯搦寺の北に大石内蔵助の大坂での仮寓居が一時あった。ここから梅田橋、田蓑橋を渡れば中之島にある赤穂藩蔵屋敷へは直ぐであった。

③思案橋(現 大手橋)の場…天野屋利兵衛(虚から実になった人物)

天野屋利兵衛は人形浄瑠璃、歌舞伎、落語の天川(河)屋義平のモデルで、浪曲、講談ではそのまま天野屋利兵衛として登場し、赤穂事件当時、大坂北組惣年寄を勤める商人で東横堀川に架かる思案橋東詰で本店を構え廻船問屋を営んでいた実在の人物であった。



伝承では大石に柄の短い手槍20本(諸説あり)を都合し、その件で大坂西町奉行所においての厳しい取調を受け、あの有名な『天野屋利兵衛は男でござる』の科白を吐き大向うを唸らせ、義商と称えられた。歌舞伎では討入りの合言葉も「天」と「川」になっている。しかし、天野屋は実際には赤穂藩とは無関係の人物であったが、時代が重なるにつれて虚から実になり、四代目天野屋は菩提寺の住吉の龍海寺に四十七士の墓や五十一体(義士と内匠頭、三平など)の木像を建立した。太平洋戦争直前の昭和15年に利兵衛の商家があった場所に近い大坂西町奉行所跡地に「義侠 天野屋利兵衛之碑」が建碑されたりした。

なお、龍海寺は明治維新の際に廃寺となり、大石親子と寺坂の三基の墓のみが住吉の一運寺に残る。また木像の方は天王寺茶臼山の観音寺に移されたが今次の戦災で焼失した。

また、天野屋のモデルは他に天川屋利兵衛や赤穂藩御用商人綿屋善右衛門も知られる。

④吉祥寺の場…寺坂吉右衛門(討ち入り後も生き残った人物)

吉良邸討ち入りの義挙に参加した寺坂吉右衛門は、討入り後、内蔵助の特命を帯びて同士一行と分かれ内匠頭の奥方瑠泉院に本懐の旨を伝え、本家の広島浅野家へも事の仔細を報告している。その後、それぞれの義士の家族などに活躍を報告するために、東は宮城県、

西は鹿児島県に出向いている。また、寺坂は江戸では幕府に遠慮して建碑できないため、四十六士の遺髪、遺爪、鎖帷子等に銀10両を添えて浅野家の大坂での菩提寺であった吉祥寺に義士たちの冥福のための建碑を依頼した。

これにより1739年(元文4年)に江戸や赤穂に先がけ、赤穂四十六士の墓が建立されている。中央の五輪塔が浅野内匠頭の墓で、向かって右側に内蔵助、左側に子の主税、その周りに残る四十四士の戒名と行年を刻んだ玉垣形の墓石が取り囲んでいる。なお、寺坂吉右衛門の墓石も後年、玉垣の一つに加えられている。



4 段目. 忠臣蔵ゆかりの地と人物を巡る探訪コースの段 (詳細は別冊を参照のこと)

①北摂エリア (三平を偲ぶコース)

箕面市萱野郷の萱野三平旧邸 (涓泉亭…萱野三平記念館) や箕面市、豊中市に存在する萱野三平の墓などを巡る探訪コース。

②大阪市きたエリア (右衛門七と内蔵助、赤穂藩の足跡を巡るコース) ②③④は組合せ可

北区の浄祐寺にある矢頭右衛門七と右衛門七の父長助の墓、浅野家蔵屋敷跡、円通院の内蔵助の父大石権内良昭の墓、福島区の大石内蔵助寓居跡などを巡る探訪コース。

③大阪市なかエリア (天野屋利兵衛の虚と実を巡るコース) ②③④は組合せ可

中央区の大手橋から本町橋周辺に点在する「義侠 天野屋利兵衛之碑」、天野屋敷跡、大坂西奉行所跡、牢屋敷跡 (現中大江小学校)、天川屋利兵衛と義士大高原吾が眠る薬王寺などを巡る探訪コース。

なお、西町奉行所は当初京橋口 (現 大手前合同庁舎) の所に東町奉行所と並んで存立していたが、1724年(享保9年)の妙知焼後本町橋詰 (現 マイドームおおさか) に移っているため赤穂事件当時は本町橋詰に西町奉行所はなかった。この事からも利兵衛の話は虚構と分かる。



④大阪市みなみエリア (忠臣蔵実感コース) ②③④は組合せ可

毎年12月14日に「義士祭」が行われ、赤穂四十七士の墓と石像などがある天王寺区の義士寺吉祥寺や赤穂四十七士の木像あった観音寺などを巡る探訪コース。

⑤その他エリア

上記①～④以外の一運寺、心願寺、郡山宿本陣 (樺の本陣)などを巡る探訪コース。

5 段目. 納口上

『この度の発表では、パソコン採りの不得手に加え、文章もお読み難いと存ねるが、どちら様におかれましても、よろしくお付き合い下され、御礼申し上げる次第で御座います～。何卒、いずれの皆様も今後ともご声援のほど、末永く宜しく陽から陽までずずずい～とく♪チョン!>御願ひ奉り～ま～す。東西、東西。』

<参考文献>

- ・『決定版「忠臣蔵」のすべて』(歴史読本 臨時増刊) 新人物往来社 1992.12
- ・文藝春秋デラックス『目で見る日本史 忠臣蔵の元禄』 文芸春秋社 1975.1
- ・『宮本又次著作集 第8巻 大阪町人論』 講談社 宮本又次 1977.4
- ・『大阪史蹟辞典』1986.7、『大阪人物辞典』2000.11、『大阪伝承地誌集成』2008.5 清文堂 三善貞司
- ・『天野屋利兵衛傳』 江崎政忠 印刷工廠 1940.12 ・『郷土研究 上方』第108号 赤穂義士号 創元社 1939.12
- ・『大阪春秋』第145号 新風書房 2012. ・週刊『歴史のミステリー』第24号 DeAGOSTINI 2008.7